
『白夜叉暗殺日記』

銀牙大蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『白夜叉暗殺日記』

【Nコード】

N1769W

【作者名】

銀牙大蛇

【あらすじ】

背中から心臓をグサリ。

―ドクン…ドクン…ドク…………

…刀越しに心臓が止まるのを確認。

俺は白夜叉を殺した―

「…あばよ…」

――ある朝起きると、そこは血の海だった。

新八や神楽が血塗れで倒れていた。

手には血に濡れた、“あの頃の刀”。

俺はすぐに“アイツ”が殺った事に気づく…。

―そして、俺の白夜叉殺しは幕を開けた―

銀さんメインの白夜又殺し小説。

真っ赤な瞳（前書き）

この小説は、病み、グロ要素がありますので観覧にはご注意ください。

銀魂小説。銀さん主人公。

真っ赤な瞳

「お前なんか死ねば良い」

…え？

突然、声が降りかかってきた。

その声は、俺の周りの…

よく知る奴等の声で成り立っていた。

「旦那が白夜叉だったなんて…」

…は…？

沖田君何言ってんの？？

「よくも今まで俺達と会ってられたな…。人のこと騙しておきな
がら…」

騙すだと？

気づかなかったのはそっちだろ！！

「銀ちゃんてば見損なったアル！！ 白夜叉のこと隠してたアルか
！！」

いやいや神楽ちゅあん？？？

お前はズラから教わってただろ？

…っつーか何だこの悪ふざけ。

何でオメエ等にそんなこと言われなきゃいけないんだ？

…何で……

何でそんな目で見んだよ!!

「銀さん……。アナタ僕たちの事まで殺すつもりだったんですか……」

は!?

何でオメエ等殺さなきゃいけないんだよ!

もう仲間を失うのはゴメンなんだ……!

「仲間……? 俺達の事仲間だと思ってたのか。 フツ……ばっかじゃねえの?」

……!?

「銀ちゃんなんか家族でも何でも無いネ」

……や……めろ……！

「オメエなんか」

「旦那なんか」

「銀ちゃんなんか」

「アンタなんか……」

——死んでしまえ!!

「いやあ!!」

…朝起きると、そこにはいつもの俺の部屋…。

あれは悪い夢だった…。

俺は、荒い呼吸と激しい動悸を落ち着かせ、汗を流しに洗面所に向かった。

―チュンチュン…

窓には雀が戯れており、朝早く起きてしまった事に気づく。

しかし、今から寝ても、到底寝付けないだろう。

あんな悪夢を見てしまったら。

――『旦那が白夜叉だったなんて…』

夢の中の沖田が言ったこと。

夢から覚めても、真剣に考えてしまう。

…いつか、知られてしまう日が来るのだろうか…

そう思うと気が気ではない。

もしバレたなら…

沖田達は夢と同じ事を、俺に言うのだろうか…

——アンタなんか死んでしまえ…！

「……まさか…な…」

俺は真っ青になった自分の顔を勢いよく洗った。

鏡に映る自分の姿が、一瞬だけ過去の姿に見えた気がして…

洗い流したはずの汗が、今度は瞳から流れ落ちた。

ガラッ

「おはようございまーす！」

しばらくして、新八が元気に万事屋にやってきた。

ブルーな俺とは真逆に、朝からやかましい。

「神楽ちゃん起きて」

新八が押し入れを開けると、神楽は既に起きていて、眠気眼でボーッとしていた。

「何だ神楽ちゃん。今日は早いね」

「……叫び声が聞こえたネ……」

「え…？」

神楽は、銀時の眠る寝室に目をやり、小声で呟いた。

「銀ちゃんの叫ぶ声が聞こえて…気になって少しだけ様子見たアル…。
銀ちゃん、鏡を見て怯えた顔してたネ…」

銀時が心配で眠れなかった、と神楽は言った。

「銀さんが…」

新八も心配になり、銀時の寝室へ向かう。

「銀さん…？　起きてるんですか？」

ゆっくり襖を開ける。

「…………あれ？」

そこには、銀時の姿は無かった。

フワッ…

午前中の風は気持ち良い。

俺は万事屋の屋根の上にいた。

新八も来た事だし、神楽の朝食は任せて平気だろう。

…俺は一人になりたかった。

『独り』は嫌い。

恐ろしく、怖いから。

…だけど、今だけは一人が良かった…。

ねえ…

新八と神楽は…

俺が居なくなったらどんな顔をする…？

悲しい？

寂しい？

…嬉しい？

俺には分からないんだ。

前の俺なら、悲しんでくれるかなって思えたかも知れない。

けど、今はその自信が無い…。

俺は本当に、ここに居て良い存在なんだろうか

沢山の天人を殺し

沢山の仲間を護れず

…そんな俺が生きていても良いの？

『家族』や仲間に囲まれて…

幸せになっても良いのか…？

…って、こんな事を思うのは、新八や神楽に失礼だな…。

俺は過去の闇に囚われず、今を大切にしなきゃいけない。

新八と神楽を、大事にしてやらないといけない…

俺は、屋根から降りて、二人が笑顔で迎えてくれるのを望んでいた。

「あ、銀さん！ 屋根に居たんですか！」

「勝手に居なくなるから心配したアルヨ！」

そこには、俺を心配してくれる『家族』が居た。

「銀さんが居なくなると困りますから、勝手に消えないで下さいね！」

…そっか…

俺が居なくなると『困る』か…

「フツ…悪かったよ」

俺が笑って言うのと、二人も笑ってくれた。

「朝食できてますから」

「おう」

「銀ちゃん、目が赤いアルヨ？」

「あ？ 生まれつきだ」

「いや、瞳の色の事じゃないですよ！？」

「分かってるよ…アレだ。屋根で寝てたら突然現れたゴリラに目潰しくらった」

「マジでか!! あのカリラ、蟹だけじゃ飽きたらず銀ちゃんまで!!」

「居るかそんなカリラ!!」

「あ? お前ん家だつてカリラ居るだろうが」

「ちよつとアンタ! 姉上に何てこと言うんですか! 姉上がカリラだなんて認めません!!」

「いや認めたよね。だつて俺『お妙』つて一言も言つてないもん」

…俺って情けねえよな。

自分より年下の奴等に気イ使わせちまって……

けど、そんな優しさに

いつも助けられてる。

時々、『もっと僕らに頼って下さい!!』って

怒られたりするけど……

俺はもう、十分お前らに頼ってんだぜ……？

一緒に居てくれるだけで

笑って側に居てくれるだけで

俺の孤独は救われる。

口には出さないけど

俺はお前らが大好きなんだ…。

だから、ずっと一緒に居て欲しい。

そうなることを、俺は望んでた…

そんな俺は、欲張りですか？
神様…

真っ赤な朝陽（前書き）

グロ表現あり

銀魂小説

真っ赤な朝陽

…俺はまた、悪夢を見ているんだ。

昨日なんかよりずっと酷い

最悪な悪夢だ……

朝、俺はまた早く起きてしまった。

何だか胸騒ぎがして、布団から飛び起きた。

—血の臭いがする……

俺は勢いよく、襖を開け放った。

「!?!?」

そこで見たのは

血塗れで横たわる

『家族』の姿だった…。

「…お、おい!!」

俺は血の海に横たわる二人に近づいて行った。

「おいしっかりしろ!!」

何度も何度も揺するが、二人はうんともすんとも言わない。

見れば、沢山の刀傷の内、致命傷と思われる大きな傷が…

二人は心臓を突き刺さされ、そこからおびただしい量の血を流していた…。

「……新八…神楽………?」

全身が震えると同時に、声も震える…。

「ちょっと待てよ…何の冗談だよ！　なあ！」

血塗れの床に、座り込む。

「おい…何でだよ…昨日まで一緒に笑ってたじゃねえか…。一緒に飯食って、一緒に居たじゃねえか……」

…何で俺を『独り』にするんだよ…

「新八ィ！　神楽アア！！」

俺は二人の亡骸にしがみついた。

離れたくなかった。

一緒に居たかった。

俺の『家族』なのに…

「…うう…ゆる…さねえ…誰がこんなことっ…！」

二人を護れなかった悔しさと

二人を失った悲しみと絶望が、

腹の底から同時に込み上げてくる…

この怒りの矛先は……

——ぜってえ許さねえ……！

新八と神楽を殺した犯人は、俺がこの手で——

——ぶっ殺す……！！

…そう決心して、右手を強く握りしめた時だった。

「…!?!」

右手に物の感触がある…。

気になって見てみる。

それは…。

「!?! こりゃあ…!?!」

白夜叉愛用の、あの刀…。

「……そんな……!!」

——ドクン……

——オレガコロシタ……!!???

俺がいつの間にか手に持っていたのは

白夜叉と唱われたあの頃の

俺しか隠し場所を知らない封印した刀だ…。

その刀には血が滴り、俺の服は返り血で赤く染まっていた。

「……嘘だ……」

全身が震え

血液が逆流するような感覚に陥る。

俺はその場で嘔吐した。

—…俺じゃねえ…

俺は何も覚えてねえ…

だから俺じゃねえ！！

必死に自分の中で弁護を繰り返す。

ふと、朝の陽射しに照され、真っ赤に輝く血黙りを見た。

—そうか……

テメエが！！

血黙りの中で、白夜又は真っ赤な齒を見せて笑っていた。

俺は、そこで意識を手放した……。

真っ赤な嘘

―『銀時…銀時……。アンタは本当に馬鹿だねえ…。どうしてあんなことしたんだい……。』

ババアの泣く声が聞こえる……

―『お登勢さん…私は信じられません…。アレほど大切に思われていた新八様や神楽様を、銀時様が殺すなんて…。何かの間違いじゃないでしょうか…。』

悲しそうなたまの声が聞こえる……

――『私だってそういたいさね…きっと何かの間違いさ…。
ね……』
けど

ババアは、俺の頭にそつと手を置いた。

「本人がコレなんだ。 弁解できないよ…」

「銀時様…目からオイルが…」

俺は声を出さず

顔にも出さず

ただ涙だけを流していた。

人前で、決して見せることの無かった…

涙が頬を伝う…。

「銀時、起きているならちゃんと話してくれ…。
んない…？」
一体何があった

虚ろな瞳をゆっくりと開き、起き上がる…。

「二階に上がったのか…」

「はい。 銀時様の叫ぶ声が聞こえて…二階に上がりました。 新八様と神楽様の息が無く、銀時様は倒れておいででした」

「んで俺はここで寝かされてたのか」

とんでもねえ寝起きだよ…

よりによって今一番会いたくなかったババアに会っちゃった…

こんな姿見せるくらいなら

永遠に目覚めなくなつて良かったのに……

「それで、どうなんだい？」

「……ああ……」

俺は朝の事を全て話した。

起きたら二人が死んでいたこと。

自分が刀を持っていたこと。

けれど何の記憶もないこと。

過去の自分が見えたこと…。

たまとババアは黙って聞いていた。

全く疑わずに聞いてくれる二人に

俺はまた静かに涙を溢した…。

「……良かった」

たまが俺を見て言った。

ババアも俺も、疑問の目をたまに向ける。

「良かったです銀時様。新八様と神楽様を殺したのが、銀時様ご自身の意志で無くて……良かった……」

そう言ってたまは、目からオイルを流す。

それを見て、ババアまで一緒に泣き出した。

——ああ、やめてくれ……

そんなに優しくするなよ……

何でコイツ等はこんなに優しいんだ……？

“過去の俺”とはいえ…

新八達を殺めてしまった俺に何故こうまでも優しい…

俺は、心の中で何度も繰り返した。

『優しくしないで』という気持ちと

『ありがとう』という言葉を

何度も繰り返した。

「…全く。 大の男が泣くなんて情けないねえ」

そう言って、ババアはハンカチを俺に渡した。

「う……るせっ……」

俺は受け取ったハンカチを使わず、自分の腕で涙を拭う。

ただ、ババアの好意を有りがたく受け取った。

ープライドなんか、もうどうでも良かった。

人前でも関係ねえ。

悲しいから泣くんだ。

悔しいから泣くんだ。

嬉しいから泣くんだ。

大切な仲間を失っているのに

プライドを先出させ泣かないなんて

そんなのただのバカヤローだ。

俺にとっちゃ、そっちの方が格好悪い。

家族の一人や二人に涙見せたって

どうってことねえさ。

俺はもう、意地を張るのをやめる。

だって、またいつ失うかわかんねえんだ…

甘えたいって思った時には…

もう隣に誰もいねえ。

そんなの俺はもう嫌だ。

そんなのもう二度とゴメンなんだ。

それに：俺は改めて思う。

俺は幸せ者なんだと。

こんな俺のために

涙を流してくれる奴等がいる。

絆で繋がった『家族』が居るんだ…。

…神様、こんな仲間に巡り合わせてくれて
本当に感謝してる。

けど、新八と神楽は返してくれ……

俺達は3人で万事屋なんだ。

俺一人じゃ何にもできねえんだよ…

俺一人じゃ……

ただの生きた屍なのさ…

「そういや……あの猫耳女はどうした…？」

さっきから、キャサリンの姿が見当たらない。

「キャサリン様なら、銀時様をこちらに運んだ後、走ってどこかに行ってしまわれました」

「……」

「銀時こそ、定春はどうしたんだい？」

「!？ 定春いねえのか？」

「はい。二階にも居ませんでした」

「?…」

定春はどこに？

アイツも俺が殺した…？

そう俺が思いかけた時だった。

「御用改めである。 …真撰組だ…」

スナックお登勢の引き戸を開けて、入ってきたのはどこか消極的な真撰組だった…。

「坂田銀時…いや、白夜叉。 テメエを天人虐殺罪、殺人罪で逮捕する…！」

―ああ、ついにこの時が来たのか…。

俺は、黒い足が立ち並ぶ床を見つめた。

そこに立つ奴等に会わせる顔が無いから…。

バタバタ！

…黒い足を掻き分け、緑色の着物が俺の目の前に立った。

「…！！ キヤサリン様…」

「コノアホノ坂田！！」

そこに立つのは、涙で顔をぐしゃぐしゃにしたキヤサリンだった。

「オメエノタメニ警察呼ンデヤッタヨ！！ アノ二人ヲ殺シヤガツテ！ 『家族』 ジャナカタノカ！ オメエノ事信ジテタノニ！！」

「キャサリン…！」

「キャサリン様…！」

—そうか……

テメエも俺の『家族』だったよな……

俺のために泣いてくれる：

「良イカアホノ坂田！ 私ガコソ泥ヤツテタ時モ、オ登勢サンヲ裏切ツテ殺ソウトシタ時モ！！ ブツ叩イテ止メテクレタノハアンタダ！！ 刑務所カラ出テキタ私ヲ受ケ入レテクレタノハ紛レモナイアンタ達ダ！！ ……ダツタラ、ソイツガ間違イヲ犯シタ時、ソイツヲ厳シク警察ニツキ渡スノハ私ノ役目ダ！ ソイツガ刑務所カラ出テキタ時、優シク受ケ入レテヤルノハ私達ナンダヨ！！」

ゼエゼエと息を切らし、俺に向かって説教をしたキャサリンは、もうあの時の性悪女とは似ても似つかなかった。

「……早く行ッテ早く帰ッテキナ。 コレ以上此処ヲ寂シクスルンジャネエヨ」

キャサリンはそう言って、部屋の奥へと姿を消した…。

キャサリンが居なくなった後、スナックお登勢の中は静まりかえった。

俺も椅子に座ったまま、真撰組も立ったまま。

お互いの出方を探りあっているようでもあった。

そんな中、口を開いたのは沖田だった…。

「旦那が白夜又だったなんて……」

「……！」

ドクンと心臓が鳴る。

今一番聞きたくない言葉を、沖田は俺に言った。

「……」

うつ向く俺に、沖田は再び口を動かす。

「旦那なんか死ねば良い……！」

頼むから…それだけは言わないでくれ…。

「まあ……、薄々気づいてはいやしたけどね…」

「……………へ……？」

「総悟…やめろ…」

「…けど…ずっと誤魔化してきた…。『旦那のはずが無い』ってずっと言い聞かせてきやした…。でも……とうとうこの日が来ちまいやした…。もう……旦那を捕まえるしかない…」

そう言って、沖田もうつ向いた。

「…まあ、そういう事だ…。 神妙にお縄につけ」

俺が抵抗しないのを見計らって、土方の部下達が俺に手錠をかけた。

俺に手錠をかけ、体を押さえる奴等も、どこことなく顔が暗い。

スナックお登勢から出ていく俺を、遠目からキャサリン、近くからたまとババアが見守っていた。

スナックお登勢の前には数台のパトカーが停まっていて、その一番先頭のパトカーに連れていかれる。

チラッと見た万事屋の看板。

もうこの看板を目にする日は来ないのだろう…。

俺は立ち止まった。

「なあ……、最後に万事屋を見せてくれ」

「…?」

俺は最後に、万事屋に入れて貰う事にした。

万事屋内では鑑識がフラッシュを炊き、神楽や新八の体を調べている。

血だらけの変わり果てた万事屋…。

昨日までの面影は無いに等しい。

俺を迎えてくれた二人の笑顔は…

“俺”がこの手で俺から奪ってしまった…。

…いや、俺だけじゃねえ。

お妙、海坊主は勿論

柳生家、吉原、スナックお登勢、真撰組、結野家、ホストの皆

源外、ツラ、長谷川さん、ヘドロ伯爵、小銭形、将軍、片栗虎……

二人に関わった奴等

これから二人に関わるはずだった奴等から

俺は二人を奪ったんだ……

「……」

「…オイ、もう良いだろ…」

土方が、俺の手錠を引っ張る。

それでも動かない俺に、土方は更に言った。

「行くぞ！ 白夜叉…」

「…!？」

俺は勢いよく振り向いた。

『白夜叉』

そう呼ばれた時、俺の何かが弾けとんだ。

段々と心拍数が上がり…

身体が燃えるように熱くなる…

—白夜叉…

「呼ぶな…呼ぶな呼ぶな呼ぶな呼ぶな!!」

「……?」

―殺せよ…白夜叉…!!

俺は両腕を土方目掛けて振り上げた。

「その名で俺を呼ぶなァァァァ!!」

ガンッ

「!!」

「ハァ…ハァ…ハァ…!!」

俺の両腕は、土方の顔の横を通りすぎ、手すりに打ち付けられた…。

「……オイ！　坂田を押さえろ！！」

部下が急いで俺を押さえつける。

けど、俺はもう暴れる気はなかった。

『白夜叉』と俺を呼ぶ幻聴。

それは正しく俺自身の声。

そして、土方の真横に、『殺せ殺せ』と歯を見せて笑う白夜叉がいた。

…その姿はもう、何処にも無かった…。

真っ赤な牢屋（前書き）

病み表現有り

（銀さんの過去を勝手に創造）

真っ赤な牢屋

「ここに入れ」

土方は俺を牢屋に入れた。

そこは真撰組屯所の地下の牢屋だ。

「何か用があったら無線を使え。 食事もここで用意する」

そう言って土方は無線を俺の前に転がし、地下を後にした。

—無線…？

無線なんか普通出さないだろ……

何で…？

何で俺に優しくするの……？

そんなことされたら、この世に未練が残っちゃう……

それに、場所も場所だ…。

普通俺みたいな奴はこんな牢屋に入れられねえ。

絶対に脱出不可能な監獄にぶちこまれるはずだ。

アイツ等は何がしたいんだよ………

「近藤さん……あんな事して大丈夫なのか？」

「あんな事？」

「無線とか普通は使わせねえ。それにアイツは監獄行きなはずだろ。確かに万事屋にはカリがあるがよ…流石に優しすぎっつか…」

「…トシ。大切な友人に優しくするのに、理由なんて要らないのさ」

「……は？」

「アイツは俺達の大切なものを守ってくれた。伊東の反乱の時も、トシと一緒に真撰組を護ってくれたろう…。アイツはもう友なんだ」

「……」

「それになトシ。御上もこの事は快く許してくれた。將軍もアイツに恩を感じてるらしい。アイツは『白夜叉』なんて名前がついてるが、必死に目の前のもん救おうする、ただの優しい人間なんだよ…」

「…………。でも、今回の事は…………」

「全く土方さんは順応性に欠けてまさア」

さっきまでいなかった沖田が、土方の後ろに立っていた。

「近藤さんがオーケーしたんだから、それに素直に従えば良いじゃないですかイ」

「…とは言っても」

「俺は旦那を信じてやす…！ 旦那があんな事するわけないでさア…！
例えしたとしても、旦那の意思じゃない…！」

「……総悟、辛いのは分かるが…」

「土方さんは馬鹿でさァ!! 真実を知れば知るほど怖い…土方さんだって辛いんでしょう!?! だったら時には目を瞑って…」

「俺達は真撰組だ。真撰組の『真』は“真実”の『真』。これに目を瞑るのは志道不覚悟だ。それを見失っちゃいけない」

「総悟。気持ちは分かる。だから俺達は、今だけでもアイツにカンを返してやるんだ。後から事情聴取を行う。お前も来い」

「……分かりやした…」

—コッソ、コッソ、コッソ…

誰かの足音が近づいてくる。

俺は閉じていた目を開け、牢屋の角から外を睨んだ。

「万事屋の旦那…？」

牢屋の前に現れたのは沖田。

…ここは廊下にしか電気が設けられていない。

沖田の影は俺に向かって真っ直ぐ伸びていた。

「旦那、取り調べらしいんで、俺と来てくだせエ」

ガチャッ

沖田は牢屋の錠前を外した。

取り調べ室に行く最中、俺と沖田は無言で歩いていた。

静かな地下の廊下に、靴音だけが響いている…。

「…んとに、ふざけてやがんな」

その沈黙を破ったのは俺だった。

「…え？」

沖田は怪訝そうな顔で俺を振り向く。

その顔はやはり18歳の少年の顔だった。

大人の、特に俺の言葉に出る“棘”に敏感に反応しやすい。

『旦那なんて』

…そう言ってさっさと俺を嫌いになっちまえば良い。

そうすれば、テメー等も俺の事で頭抱えなくて済むはずだろう？

俺は、わざと毒々しい態度で沖田に言った。

「監獄送りにしねえわ、無線とか余計な気イ使うわ、錠前なんて脆い鍵つけるわ…。」
あんなん素手でぶっ壊せんだろうが」

「……」

「テメー等何？ 俺にカリでも返そうとしてるわけ？ ……きつもち
悪い事してんじゃねえよ！ 迷惑なんだよ！」

…俺のその声はもちろん、近くまで来ていた取り調べ室の中の、土
方や近藤。

そして無線を通して真撰組の一部にも行き渡っていた。

周りに出てきた隊士の俺を見る目が、徐々に冷たい物へと変わって
いく…

そうだ。

それで良い。

もう俺に優しくなんかしないでくれ。

そんな俺の言葉を背に、沖田は何も言い返さず、取り調べ室のドアをノックする。

「失礼しやす。連れてきやしたぜイ」

「：おう、ご苦労だった」

俺は取り調べ室に踏み入れた。

「坂田銀時。これからテメーの取り調べを行う。嘘や誤魔化しは一切通用しねえ。正直に質問に答えろ」

取り調べ室には、事務机とパイプ椅子があり、事務机には書類が置かれ、壁には沢山の拷問道具がぶら下がっていた。

目の前の椅子に土方と近藤、壁に沖田が寄りかかり、土方は俺を睨んで質問をしてきた。

「で、何を答えば良いの？」

俺は卑屈な目で土方を見下し、腕を組んで机に足を投げ出した。

「…っ!」

案の定、土方はすぐに怒ってくれる。

俺は心の中で卑しく嘲笑った。

「…ん　ん…！　じゃあまず、今朝の殺傷事件の質問だ」

怒りを無理に抑える土方に代わって、近藤が咳払いをして質問を始めた。

「…何で二人を殺した…？」

「……」

近藤は警察にも関わらず、いつもと変わらない口調で俺に質問をする。

“二人”なんて言って…

『志村新八と神楽』ってちゃんと言おうぜ…

「おい、さっさと答えやがれ」

黙りこくる俺に、土方は言った。

「…はっ、んなの『ウゼエから』に決まってるだろ…？」

「…！？」

俺の返答に、3人は目を丸くして驚いた。

そうなるなら聞かなきゃ良いものを…

『警察は可哀想だ』と俺は思った。

「新八は突っ込みウゼし、神楽は大食いじゃん？ 俺ん家貧乏で
余裕なんか無いわけ。 それなのに人雇ったり天人泊めたりしてて
馬鹿みてえじゃん。 だから殺したんだよ」

「……」

固まる3人。

いや、沖田だけは震えていた。

俺の良心はズタズタに引き裂かれて、今頃深海の海底に沈んでいる。

今の俺にあるのは、腐りきった鬼畜の魂。

今まで散々嫌っていたはずの類いの心だけ。

俺はもう人間じゃ無い。

「…それで他は？」

俺は、尋問をさも楽しんでいるかのように笑う。

そうする事で良心を捨てた。

今すぐ死刑が決まらなくても、裁判官がこの尋問の資料を読んだとき

一目で死刑にしたいくなるような酷い資料を

誰もが俺の死を心から喜ぶような醜い魂を

さらけ出して

形にするんだ。

「…本当にそれが動機なのか…？」

「そうだよ。俺アもう疲れたんだ。仲良し家族演じてんのが」

「…っ」

「凶器は刀で間違いねえんだな？」

「ああ」

「その刀は攘夷戦争時に使われていた物なんだな？」

「ああ」

「お前は人殺しを何とも思っていないのか？」

「ああ！」

人間なんてたんぱく質の塊なんだ。

たんぱく質斬ったってどうにもなるめえよ。

…俺は最後にそう付け足した。

「……………なら、質問を変えるぞ。今でも攘夷活動は？」

「ヅラと高杉を手伝ってますが何か」

「…っ、テメェ何だその態度…!!」

土方が俺に手をあげる。

咄嗟に近藤が止めに入った。

「やめろトシ！」

「近藤さんっ！ もう我慢ならねえ!! 正直に答えろって言ったのに嘘しか付きやがらねえ!!」

「何それ、俺の事？　笑っちゃうね。　なんなら嘘発見機にでもかけたら？」

俺はそんな土方を見上げて怪しく笑う。

「上等だ！！」

「上等じゃないって！！　良いから座れ！！」

近藤の手によって、土方は座らせられた。

「チッ…、質問を続ける！　テメエの戸籍の件だが…、何でテメエには戸籍が無エ？」

「……戸籍……？」

…そういえば俺…

戸籍無いままだっけ…

変な話だよな。

今までずっと名乗ってきた名前も

今までずっと呼ばれてきた名前も

全部、存在してなかったんだ…

俺は生きた亡霊だ。

河上万斉にも言われた…。

「戸籍の事は知らねえ」

「知らないだと？ 馬鹿言うんじゃない」

本日初めて本当の事を喋ったのに

この扱い用だ。

「真面目に。俺は知らねえ」

「テメエの親はどうした？」

「親？ んなモン居ねえよ」

「何でだ？」

「俺が殺した」

3人はまた、瞳孔を開きっぱなしで驚きを顔に出す。

そんなに俺がおかしいか。

おかしいよな…

じゃなきゃ俺は捨てられてない。

3人の顔は、まるで俺を初めて見た時にする人間の顔だった。

「俺の親、顔も覚えてねえがよ。偉く馬鹿で無責任な奴等だったぜ」

よくもまあ、俺なんかを産み落としてくれたもんだ。

面倒見る気も無かったくせに

無責任にも程がある。

「ソイツ等があんまり俺に煩いから、ついザクツとな」

俺は刀で刺す動作をして見せた。

確かに煩かった。

親は俺に煩い。

俺の髪が銀だから

何度も俺の髪を引き抜いて

無駄だと知って部屋の奥に隠してしまう。

家の外に出た事なんかほとんど無い。

絶対に出れないようにと

部屋に鍵をかけられた。

その時の鍵が錠前式だったから

今でも簡単に外すコツを覚えている。

「俺が触った物なんか、すぐに新しいのに取り替えてたな…」

「……は…？」

「…いや、何でもねえよ」

つい余計な事を言ってしまった。

「……まあ良い。それで、親はお前の出産届けを出さなかった訳か」

「まあそういう事だ」

「うん……、じゃあ何時もお前が名乗っている名前は誰が決めた？
その様子だと、親って事は無さそうだ」

「……………」

意外にも、近藤が鋭い事を聞いてきた。

この質問に、答える意味は果たしてあるのだろうか。

「…吉田松陽って知ってるか？」

「……ああ。御上は昔その男に助言を貰っていたそうだ」

「…その松陽が、俺に名前を付けた」

「なっ、だがソイツは若くして死ん…」

「そうだよ。俺の名前を付けた後、俺に殺された」

「……お前はその年にして沢山の人を…」

「そうだ。俺が殺した。皆みんな、俺が殺した！！」

近藤達も、もう理由は聞かなかった。

理由を聞いても、近藤達が欲しい動機は返ってこないから。

全部俺の行き過ぎた誤魔化ししか返ってこないから。

こんなバレバレの嘘……

すぐにバレちまう。

俺は馬鹿だ。

もつとマシな嘘は付けねえのか

こんなんじゃない俺の死刑宣告はまだ程遠い。

もつと酷い言葉は出ねえのか……？

良心なんか今は捨てたはずだろ……

「……ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

気がつけば、俺は大量の汗をかいて胸を押さえていた。

胸が苦しい……

「……だ、大丈夫ですかイ旦那！？」

「万事屋??」

3人が心配そうに俺を見る。

沖田が駆けてきて、俺の背中を擦った。

「…めろ！　俺に触んな!!」

焦った俺は、沖田を腕で突き飛ばす。

ドカンッ、という音を立てて、沖田は壁に叩きつけられた。

その際に、拷問道具が床に落ちる。

それを拾い上げた土方に、俺は言った。

「……殺……れよ……俺を殺れよ!!」

これ以上誰かを傷つけないように

「俺を殺せよ!!」

「お前何言ってやがる……」

土方が冷たい目で俺を見る。

言葉とは裏腹に、その目には微かな殺気が籠っていた。

土方だって許せないはずだ。

こんな馬鹿な俺を

黙らせたいはずだ。

「良いか?? 俺が攘夷戦争に参加したのはなあ、沢山血を浴びたかったからだ…。 すごいんだぜエ? 天人って化け物のクセに血はちゃんと真っ赤なんだ。 あははっ」

俺は歯を見せて笑う。

「……まれ…」

すると土方は口をパクパクと動かす。

「あの、肉が裂けて骨の割れる感覚が堪んねえよな……テメエなら分かんだろ? 土方君よオ」

「黙れ!!」

ドカツ！！

…やつとだ。

やつと、土方は俺を殴った。

ただし、メリケンもない素手で。

「…素手かよ。 どうした？ 何で道具を使わねえ！！ そこにぶら下がってる凶器は飾りか！？ ああ！？ 」

「るっせえそれ以上抜かすとぶっ殺すぞ！！ 」

俺と土方は、終いには殴りあっていて

俺にとって死にたいくらい苦痛だった取り調べは、こうして終わり

を告げた…。

牢屋に戻った俺は、まず壁に頭を何度も叩きつけた。

沖田に与えた痛みよりもっと激しく

血が飛び散る程に強く

何度も何度も叩きつけた…。

そのうち意識が朦朧としてきて、床に倒れ伏す。

冷たい牢屋の床…

けどきつと俺の心よりは温かい。

額から流れる血も、また温かった。

…許せない…

自分が

許せない……

どうして俺があんな事を言わなくちゃならなかったんだ……？

今になって思う……

俺は新八と神楽がウザくて殺したんじゃない。

愛していた

大切にしていた二人を殺せるわけがない。

……全部アイツのせいなんだ……

白夜叉：

新八と神楽が死んだのも

松陽先生を呼び捨てしなくちゃいけなかったのも

殺したって嘘つかなきゃいけなかったのも

全部全部白夜叉のせいだ：！！

：だけど、白夜叉は俺の過去。

結局俺のせいなんだ……

…ダメだ。

チクシヨウ……

頭がごちゃごちゃしてる。

俺は狂ってる……

もう嫌だ……

何でこんなに苦しいの？

生きてるから苦しいの？

死ねば楽になれますか……？

牢屋でポツリと呟いても

返事なんか来るはずもなかった。

それから俺は、目を閉じて眠る事にした。

敷いてある布団は使わずに

部屋の角に腰をおろす。

布団なんて贅沢なもの：

使ったら新八達に申し訳がない。

そうして時は一刻一刻と過ぎていく。

だけど、眠れない。

今日、色んな事がありすぎて

まだ脳が興奮しているんだ。

そのせいで、自分の心臓の音がやけに大きく聞こえてくる。

静かな牢屋の中

余計に耳障りだ。

―ドクン、ドクン。

…その単調なリズムの中で

弁が開き、血が流れ込んで、また送り出す。

その作業を永遠と続け

俺の事を死なせてくれないんだ。

だから今

舌を噛みきって

この牢屋を真っ赤に塗り潰してやろうか

そんな事を考えた。

血塗れの室内

失血の体内

そうすれば、心臓も諦めて止まってくれるだろう。

俺は血を浴びるのが好きだ。

『攘夷戦争に参加したのは沢山の血を浴びたかったから』

さっき俺が言った事……

これは実は嘘じゃない。

俺はこの銀色の髪を憎んでた……

恨んでた……。

ずっと……

赤い目はまだ良い

案外探せば居るものだ。

けど銀髪は違う。

銀髪は俺だけだ。

だから俺は怖がられて

嫌われて

殺されそうになって：

俺から何かをしたわけでも無いのに

だから、銀髪はイケナイものなんだ、と小さいながらに思ったものだ。

俺はイケナイ存在なんだと……

だから、戦争では血を浴びた。

銀髪を隠すように

血で真っ赤に染めてやる

そうすれば誰も俺から逃げたりしない

…そう思っていた。

が、それは間違いだった。

斬って血を浴びて

殺して血を浴びて

いつの間にか『白夜叉』なんて呼び名がついてた……。

それにどっちみち『白』と言う字を使われて……

肝心な所が変わってない…。

…周りをもっと俺を恐れた。

…血を浴びるのは好き。

けど、新八と神楽の血を浴びたいなんて俺は言っていない。

言っていない。

言っていないってば……

…段々と襲ってきた睡魔に身を委ねる。

―ああ神様、どうか今日の事は全てただの悪夢にしてください。

明日になれば全て元通りって

俺と約束してくれ…。

真っ赤な鬼（前書き）

銀魂 病み銀注意。

真っ赤な鬼

―チュン…バサバサ…

迎いの牢屋の窓から

朝のまばゆい光が差し込んできた。

「もう朝か…」

俺は一睡も出来なかった。

神様は約束を破った…。

—カツカツカツ……

「旦那、朝飯ですよ」

昨日と何にも変わらない景色の中で

山崎はにっこりと笑っていた。

そして飯の乗ったトレーを、俺の牢屋の中に滑り込ませる。

「おはようございます旦那。昨日の取り調べはお疲れでしたね。
あの後副長押さえるの大変で……」

そう言って、山崎は頭を掻いた。

俺は何も言わないで

凍りついた瞳で山崎を見詰めた。

…どうしてお前は笑ってるの…？

「食べ終わったら無線で知らせて下さい。

それじゃ失礼します」

キイツ、ガチャリ

どうして笑っているのか理由を聞く前に

山崎は牢屋から姿を消した。

俺はホカホカ湯気をあげる飯を見た。

ご飯、魚、味噌汁、牛乳。

牢屋の飯には豪華すぎる。

パンと水だけがベターだと思っていた。

まだアイツ等は俺に気を使っているのか

学習しねえ奴等だ。

俺は飯に手をつけることなく

ただボーッと迎いの窓の外を眺めた。

何もしない内に空には雲が多くなって

お昼時を知らせていた。

「旦那！　まだ飯食ってなかったんですか！」

俺が無線で知らせないのをおかしく思ったのか

山崎が下に降りてきた。

窓の外には隊士達が素振りをしていて

そこからわざわざ抜けて俺の様子を見に来ていた。

「ちゃんと食べなくちゃダメじゃないですかー」

そう言ってトレーを持ち上げる。

「ちょっとこれ、温めてきます。それと旦那、旦那に客人です」

「……？」

山崎と入れ替わりで鉄格子の前に現れたのは女。

「こんにちは、銀さん」

そこに立っていたのは

髪も結ばない

やつれた顔のお妙だった。

——ドクンッ……！

「お……妙……！！」

新八の血縁者……

たった一人の家族を俺に殺された女——

いつになく、俺は動揺していた。

お妙は弟を殺されて

俺の事を物凄く憎んでいる女。

今にでも殺してやりたいと思っている女。

そう、俺は思い込んでいた。

「お久しぶりですね銀さん。少し気になったので来ちゃいました」

「……!？」

だけど俺の思い込みとは真逆にお妙は笑った。

その笑顔に、俺の胸が締め付けられる。

お前も笑うのか

お前も俺に何も責めてこない

何なんだ

どうなってんだ

何で俺に笑顔を向けられるんだ？

俺は新八を殺したんだぞ！！

「テメエ……俺が誰だか分かってんのか……？」

俺はお妙に詰め寄った。

「俺は新八を殺した。なのに何で笑ってやがる……」

低くドスの効いた声を

お妙の頭上から振りまく。

「そんな事、私の勝手でしょう？」

けれどお妙は動じない。

真っ直ぐと、俺の目を見た。

「殴りにきたんじゃないかねえのか…？」

「貴方を殴って新ちゃんが生き返るなら、いくらでも殴りますよ。それに、事情もお登勢さんから聞きました」

「……」

「銀さんの事は恨めない。新ちゃんや神楽ちゃんを殺した事実よりも、新ちゃんや神楽ちゃんを護ってきた事実の方が明らかに多いでしょ。皆で楽しく過ごしていた思い出の中の銀さんは、あんな事できる人じゃない。家族を殺してまで生きようとするような、強い人間じゃない。そうでしょ？」

お妙は涙を浮かべて、俺の額の傷を撫でた。

「だから私、銀さんを恨めない。どんなに危険な所にでも命をか

けて仲間を護りにいく、優しい貴方を信じてるから…」

「……………」

静かに泣き出したお妙に、俺は何も言ってやれる事が出来なかった。

俺なんかよりも小さい背中で

俺よりも強い魂を持つ女。

それが新八の姉

お妙だった…。

その後、お妙は二人の葬式の日程を俺に言い、静かに地下から出ていった。

葬式か……

俺は行ってやれねえんだろうな…

真撰組に頼めば、行けないことはない。

だけど、どの面下げて葬式行けってんだ…？

殺した本人がノコノコと

行けるわけがねえ。

ガシャンッ

「旦那、飯温めてきましたよ。今度はちゃんと食べて下さいね」

「……!!」

山崎が帰ってきた。

山崎が、一瞬新八に見えた……。

それからと言うもの、俺の牢屋には知人が来るようになった。

ヘドロが花を置きにきてくれたり

長谷川さんがこっそり酒瓶を持ってきてくれたり

色んな人がやってきた。

俺は一向に監獄に送られる事なく

飯を口にする事もなく

段々と痩せ細っていく体で客人を迎える。

その客人達は、

最初は笑顔で来る者が多いが

最後には泣いて帰って行く者も

また多かった。

分かった：

近藤が何故俺をここに止めているのか

俺の醜態を仲間に晒すためだ。

俺に会いたがる人達が簡単に俺に会えるように

それもある。

だけどそれだけじゃない。

俺が犯した罪によって、どれだけの人達が涙を流したか

どれだけの人達が俺の事を心配しているのか

その事を俺に教えるためだ。

だけど俺は段々と衰弱していつて

使わない声は掠れていつて

血が乾いてガチガチになった囚人服を見せびらかす事になる。

それは俺の変わり果てた姿であり

醜態だ。

そんな姿を仲間に見せなくてはならないんだ。

ああ見えて、近藤は切れ者だ。

牢屋に入ってから二週間ほど経った。

相変わらず飯は食っていない。

普通なら、二週間何も飲まず食わずで生きている人間はいない。

それなのに、未だに俺の心臓は止まることを知らない。

俺の胸の中で、全く別の何かが生きている。

そんな感じがした。

ソイツを握り潰すため、必死に胸を掻き続ける。

いくらやってもソイツには辿り着けず

ただ胸には真っ赤な爪痕だけが残った。

…死ねない……

どう足掻いても俺は死ねない……

俺は自分の異常なまでの生命力を崇めた。

死ねない事への悲しみにひたすら涙を溢した。

「……」

「……？」

窓の外で、子猫の鳴き声が聞こえた。

「ミィー」

猫の声は窓のすぐ近くで聞こえる。

俺は牢屋の布団を折り畳み、その上に乗って窓の外を見た。

牢屋は地下にある。

けれど高い場所にある窓は、地面に埋もれていないため、遠くから見れば空の色、同じ高さから見れば隊士達の足が見える。

その窓を覗けば、久しぶりに見る土があり、草があった。

そして目の前には、真っ白な子猫。

その子猫は俺を見つけると、俺の方に近寄ってきた。

思わず手で持ち上げ、牢屋の中に連れ込んでしまった。

「ミィミィミィ」

子猫は頻繁に鳴き、俺の手から出た頭でキョロキョロしている。

その子猫から、温かい何かが伝わってきた。

もう、忘れてしまっていた

生き物の温もり。

何て温かく、可愛いものなんだろう。

よく見れば、子猫は青い瞳をしていた。

神楽と同じ青い目だ。

俺はこの子猫に飯を与え、育てる事にした。

「ミーマー」

窓の外にはまだ沢山の子猫がおり、母親と思われる猫も居る。

丁度良い。

コイツらをまとめて飼ってしまおう。

俺は食べなかった飯を全て窓の外に流し、猫に与えた。

こうして器は綺麗に空になり

俺が食べたようにカモフラージュする事ができた。

「ジミー、取りに来て」

掠れた声で、初めて山崎に無線を通した。

「旦那……やっぱり食べてないんですかい」

雨降りの夜、沖田は俺の牢屋に入ってきた。

そう言った沖田の顔は、雷に照らされると悲しい顔をしている様だった。

俺が飯を食べたフリをして猫に与えていたのが、もうバレてしまったようだ。

「最近どうも敷地内に猫が多いと思ったら、旦那が餌付けしてた訳ですかイ」

「……」

「ねえ旦那どうしてでさア…何で食べてくれないんでさア…！」

沖田は俺の前まで来て、膝をついた。

手は俺の両襟を掴んで、震えているのが伝わってくる。

「…旦那！！ このままだと旦那死んじまいますぜイ！？」

何も返して来ない俺に、沖田は焦った声を出した。

「旦那！！ 旦那聞いてやすかい！？ 旦那！！ …旦那…？」

肺が動いてないように見えたのか、沖田は震えながら俺を抱き締めた。

俺の心臓の音を確認すると、沖田は安堵のため息を漏らす。

「…ハア…………旦那、聞こえてやすでしょう？ 何か言ってください
エ…」

「…あ…」

「…え？」

ゆっくりと口を開き、か細い声を出す。

「新…八…と…神楽…は…もう…飯を食う…事だっ…………て、…でき
な…い…」

「…………んな！！ 何言っ…………、旦那は生きてるのに…」

「俺は…………もう…死に…た…い…」

「…!?」

「ねえ沖…田クン…」

…俺の死刑はまだ…？」

沖田はしばらく固まっていると、俺を抱き締めながら泣き始めた。

すぐに土方がやって来て、沖田を呼び掛ける。

「オイ総悟、もう部屋に戻れ」

「嫌でさァ…！ 誰かが見てないと何時旦那が…」

「後は俺が見とく。だからお前は休め」

「嫌でさァ！土方さんは旦那を傷つける…！」

「総悟！！近藤さんがテメエを心配してんのが分かんねえのか！
！テメエが一番隊仕切らなきゃいけないんだ！テメエの士気が
下がると隊全体に影響すんだよ！身勝手なことするんじゃない
！」

「……クソ土方が…！」

沖田は呟くと、部屋に戻って行った。

「ハア、たくよお…。オメエはとんでもねえ野郎だな万事屋…。
総悟もあんなっちまうし、山崎も落ち込んでる。近藤さんも毎
日アイツ等を励ましてやってる。…それに牢屋に酒瓶持ってくる
奴がいるとはな」

土方は、牢屋の隅っこに置いてある花と酒瓶を見つめた。

「デメエ、あれ開けたか？」

「…まだだ」

「そうか」

土方は酒瓶を取ってくると、猫にあげて空になった器に酒を注いだ。

「久しぶりだろ。 飲めよ」

土方はそれを俺の口元に運ぶ。

俺は目を閉じたまま、口も閉じたまま、全く動かない。

「どうした？　早く飲めよ。腕が疲れる」

けれど、俺は飲もうとしない。

やけになった土方は、どうしても酒を飲ませたいらしく、口に無理矢理流し込む。

それでも俺が飲み込まないので、土方は俺の鼻を摘まむ。

いくら待っても俺は飲み込まない。

代わりに顔色がどんどん悪くなっていく。

「…テメエ、息しねえつもりかよ!!」

土方は仕方なく手を話した。

「飲めよ!! 酒くらい飲め!! 本当に死ぬつもりか!?!」

「…ふふふ…」

「!?!…テメエ…」

俺は『死ぬつもりか』という質問に

「そうだよ」、と鼻で笑って答えた。

「…バカ野郎。これ以上総悟達を悲しませるつもりなのか…?」

「…」

「テメエの友人だろ、長谷川さんは。その友人の酒も飲めねえつてのか」

「……………」

そう言われると、飲まざるおえないような気がしてくる。

…ゴクッ

俺は約二週間ぶりに喉に物を通した。

「それで良い。もっと飲め」

土方は俺の口に酒を流し込む。

それを、俺は胃の中に納める。

その作業を何回か続けると、土方は手を止めた。

「もうテメエで飲めんだろ？ 飯もちゃんと食っておけよな」

土方は器を俺に差し出す。

だが俺は受け取ろうとしない。

「おい、早く取れ」

「……？」

俺は土方が何か渡そうとしている事に気づいて、目を開けた。

それが器なのは分かっている。

けれど俺の死んだ魚の目は

土方以外の物に視点を合わせる。

「オイ、どこ見てる。目の前にあんだろうが」

そう言われて、俺は手を伸ばすも、手は何度か中を掴み、やっと器に触れた。

「……万事屋……まさかオメエ……！」

土方は俺の目の前で手を降った。

だが、俺は何の反応も示さない。

ただ、風の切る音が耳に届くだけだ。

「オメエ……目が……」

俺の目は、長い間何も食べなかったせいで、ほとんど見えなくなっていた。

先ほどの雷のように、強い光に照らされないかぎり、俺の瞳には何も写らない。

だから、土方が今どんな表情で俺を見ているのか、知る術は無い。

「……もう…良い」

土方はボソツとそう言った。

何がもう良いのか…

土方は再び俺に酒を飲ませた。

「もういらな…」

「良いから。飲んで忘れろ。全部忘れろ」

強い酒だったため、すぐに酔いは廻ってきた。

土方はがむしゃらに酒を飲ませ続ける。

俺が「いない」と言ってもお構い無し。

『飲んで忘れろ』

そう言う土方の方が、何かを忘れたがっているようだ。

「……っ」

全身が熱い。

土方はやっと酒を持つ手を止めた。

土方のおかげで心臓はドクドクやかましく鼓動し始め、睡魔が襲い

かかってきた。

寝ないと決めていたのに、土方のせいで今にも眠ってしまいそうだ。

「早く寝ろ」

「…ちく…しょ…う」

俺は意識を手放した。

「山崎、アレを頼む。」

ああ。

今すぐだ」

—ミ—ミ—ミ—ミ—ミ—ミ—

…ね…こ……？

猫が上に乗ってきた

—ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…

…何の音だ…？

段々と意識が戻るにつれ、猫の鳴き声と不快な機械音が交互に入れ混じるのに気づいた。

…まさか……

俺は重い瞼を開けた。

案の定、そこには心電図があり、俺の心臓が動くのをわざわざ伝えてくる。

そして俺はベッドに寝かされていて、腕には点滴。

栄養がそこから俺に流れている。

俺は怒りを覚えた。

目はたった1日点滴をされただけで、もう視力を取り戻しつつあった。

「ふざけんなっ…!!」

―ピッ…ピッピッピッピッピッ…

怒りに乗じて心電図も速くなる。

煩くて堪らない。

―何で俺を死なせてくれない???

何で俺を生かそうとするの!?

真撰組の奴等全員呪ってやる!!

—ピッピッピッピッ…

「うるせえなもう!!」

心電図のコードを切ろうとするものの

体は全く言うことを聞かず、

ただその音を聞いているしか無かった。

段々と日が暮れてきた頃、手はかろうじて動くようになってきた。

その手で俺は、手首の点滴と、胸のコードを引き抜く。

途端に注射器が床に垂れ下がり、ピー、という音が牢屋内に響いた。

「にゃーお」

白い毛並みに青い瞳の親猫が、俺の胸に飛び乗った。

その猫をしばらく撫でていたが、猫は何かに気づいて毛を逆立てた。

ゴトツ

刹那、牢屋の床の石のタイルが一つ浮いた。

中から出てきたのは、俺の古くからの知り合いだった。

「銀時」

「…ズラか」

「ズラじゃない桂だ」

ああ、この会話は何時ぶりだろう…

「お前の様子を見に来てやったぞ」

「別に見に來いなんて頼んでねえけど」

「まあそう言うな。……どうだ、調子は」

「見ての通りだよ」

ヅラは牢屋の中に上がり込み、ゆっくりと俺の方に歩み寄った。

「なるほどな。もはや動く事もままならんか。銀時、貴様飯を摂って無かったのだろう。随分と痩せたものだな。至るところに血管が透けている」

「こんな血管、本当はいらないんだけど。俺にはどうする事もできない」

「……」

少しの間、牢屋は沈黙に包まれる。

ヅラは下を向いていた顔を上げ、言った。

「銀時、ここから逃げよう」

「は？」　　っという顔で、俺はヅラを凝視した。

対してヅラは、真剣な面立ちで俺を見る。

「貴様、死ぬつもりだろう？ 俺には分かる。今のお前からは生きようとする意志が全く伝わってこない」

「…」

「お前はここで死ぬのにはもったいない。生き延びて、罪を償おう」

「……悪イが、それはできない。今逃げたら、新八達の死が無駄になっちまう」

「何故だ…？」

「俺は鬼だ。大切な仲間さえも切り刻む鬼だ。そんな俺は、こんな所で生きてちゃならねえ存在だ。もう二度と仲間を傷つけないためにも、俺は死んだ方が良い。…新八達を殺したきっかけで、やっと俺に死ぬ口実ができたんだ…、だから今逃げたら、そいつが全てパーだ」

「…だが銀時！」

「うるせえ！ ……もう、決めた事なんだ…」

「……………。変わってしまったな、銀時……」

ヅラは酷、悲しい顔をした。

「覚えているか？ お前が昔言った言葉を……」

「……ああ」

「『美しく最後を飾り付ける暇があるなら、美しく、最後まで生きようじゃねえか』……貴様は俺にそう言った。だが今のお前も、うあの時のお前では無い……」

「……そうかもな。だがよ、俺は俺が死ぬ事で、己の魂が救われると思う。今の俺が鬼であるからこそ、ソイツを殺す事で元の自分に戻れると思うんだ」

「……銀時、貴様は鬼なんかじゃ無い。貴様は俺の誇れる友だ……」

「……あんがとよ……」

ヅラは涙を流しながら俺との別れを惜しみ、しばらくして床の下に消えていった。

俺は再び猫を撫でながら、色んな事を考えた。

こんなになった俺を、ヅラはまだ友と呼んでくれた。

だけどそんなヅラに、俺はもう何の恩返しもしてやれないんだ。

代わりに突き放す事はいくらだって。

けどさっきの俺はそのどちらもヅラにしなかった。

真撰組は突き放せた。

厳しく当たれた。

なのに何故ヅラには何時も通りだったのだろうか

：それはこの猫が居たからかも知れない。

ヅラは最後に言った。

『お前が鬼じゃない理由はもう一つある。その猫、お前になついているのだろうか？』

—お前はその猫を見捨てられなかった。

やはりお前はいつの間にか何かを背負ってしまふ。

そんなお前に、死ぬ事などできない—

…ヅラの言う通りかも知れなかった。

俺はベッドの上で力なく項垂れた。

これまでの俺の努力は何だったのか…。

真っ赤な鬼（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。 体育祭練習などにより時間がありませんでした。 長らく書いていなかったため、文章表現が雑になっています。 感想、お気に入り大変嬉しいです。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1769w/>

『白夜叉暗殺日記』

2011年10月9日14時55分発行